

機関番号：13501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520157

研究課題名（和文） 藤原道長家の後宮サロンの実態とその文学活動に関する研究

研究課題名（英文） Study about the reality of the seraglio salon and the literary campaign of Fujiwarano Michinaga family

研究代表者

池田 尚隆（IKEDA NAOTAKA）

山梨大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：70151298

研究成果の概要（和文）：平安時代の後宮は女性作者による多彩で豊かな文学作品を生み出した。その実態を藤原道長の娘である彰子のサロンを中心に考察した。日記、和歌、歴史物語などの文学作品に加え、儀式、仏教などさまざまな角度から検討することで、文学のみならず、政治や経済、宗教などの観点も加えて総合的に捉えることができた。さらに、そのような環境を念頭に置くことで、『源氏物語』などの虚構の作品についても新たな読みが生れることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The Seraglio salon in the Heian Period invented a rich and diverse literary works by female authors. I considered its reality centering on the salon of Fujiwara Syoshi who was the daughter of Fujiwara Michinaga.

The ceremony and the Buddhism as well as a diary, a poetry and a chronicle were considered from various points of view. And the angle of the politics, the economy and the religion as well as the literature has been also added. As a result, I could catch the problem overall.

By knowing such environment, I made it clear that new reading is also born about fictions like "the Tale of Genji".

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2010年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 総計     | 2,000,000 | 600,000 | 2,600,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：平安時代、後宮サロン、藤原道長、藤原彰子

## 1. 研究開始当初の背景

平安時代中期、すなわち摂関政治の時代は、後宮が政治・文化の中心であったと言っても過言ではない。絶大な権力を握る摂政・関白が、多くの場合、天皇の母系尊属で血縁的に最も近い貴族から選ばれたから、誰が入内し、寵愛され、男子を産むか、すなわち後宮の動向は、貴族社会における何よりの重大事であった。

当然、摂関を望む上級貴族は娘を入内させるため、天皇の愛情を得るために、あらゆる努力をする。娘の教育、乳母の選択に始まり、貴婦人としての教養を身に付けさせることに奔走する。

それと平行して多数の女房の採用が行われた。本来は使用者であってもおかしくない良家の女子を女房として雇用できれば大いに自家の名誉となったから、あらゆる手段を駆使して勧誘が行われた。もちろん若く美しい女房達、機知に富む女房達、さまざまな文化的分野に格別の力量を有する女房達も集められる。魅力あるサロンを形成することで、天皇を引きつけようとしたのである。

そのような時代風潮のなか、摂関期最大の政治家藤原道長が、娘の教育とサロン形成においても突出した存在であったことは、むしろ当然である。長女彰子のもとには平安時代を代表する女性文学者達、すなわち紫式部、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔らが集っていた。もともと豊かな才能を有する彼女達が、そのような環境のなかでより作品を洗練させていったと考えられる。

摂関期の後宮におけるサロンは、日本文学の華の一つである摂関期の女性文学の温床であった。その実態の解明は重要な課題である。しかし、資料的な制約があり、なかなか研究が進んでいないのが実情であった。女房達の素性については、当時の男性貴族の日記（古記録）や系図が主な資料になる。萩谷朴氏が『紫式部日記全注釈 上・下』（昭和46・48年 角川書店）で、『紫式部日記』に名のみえる女房達に行った精密な研究がそれに当たる。しかし、注釈書という制約もあって、個々の人物の素性や経歴が中心で、サロン内部の動向にまで踏み込むことは難しかった。

その後もサロンの営為の結果としての文学作品それ自体の研究は進んだものの、サロンの全貌を明かして、そこから再び文学作品に立ち戻るといふ、重要な研究は立ち後れたままとなっていた。

## 2. 研究の目的

### (1) 後宮サロンの実態を解明する。

後宮サロンとの深い関わりによって生み出された平安文学においては、サロン集団の解明があつてこそ個の独自性も際だつたであり、従来不十分であった集団の全貌を明らかにすることを第一の目標とした。

### (2) 続いて、後宮サロンの実態を踏まえて、平安文学の特徴を考察する。

摂関期に後宮を中心として女性による文学が華開いていく様相を、日常の生活や人間関係、価値観、宗教観から捉え直す。また、従来から知られた資料も、和歌なら和

歌研究、儀式なら儀式研究、仏教なら仏教研究と、資料ごとに研究が完結する様相を呈してきた。後宮サロンの解明に特化してさまざまな領域の資料を横断的に見渡すことで、平安文学のもっとも重要な時代における創作の実態を明らかにしたいと考えた。

### 3. 研究の方法

撰関期のサロン研究において、当時の文学作品や古記録類が主要な資料であることは言うまでもない。しかし、サロン研究がなかなか進まない状況から、作品の読みに関しても資料に関しても、新たな角度から考え直す必要があると思われた。

すなわち、まずはあくまでサロンの諸相を解き明かすという発想から諸資料を捉え直すことが必要であり、同時に、当時の文化の実態を踏まえ、今まで注目されることの少なかった角度、例えば儀式や宗教といった方向からも研究を進めなければならない。

その際、平安中期最大のサロンを形成し、資料にも恵まれた藤原道長家の実態の解明が何より重要な課題であると考えた。

具体的には、次のような方法で研究を進めた。

#### 2008年度

(1) 私家集を中心とした和歌資料の調査  
私家集を順次調査し、後宮サロンの交流関係という視点から関係記事を洗い出した。その際、詞書等にみえる直接的なやりとりだけでなく、歌語や歌枕の使用など、和歌表現における特徴的な技巧の有無に注目し、集団特有の詠歌基盤の解明にも務めた。

(2) 『源氏物語』とその周辺に関する再検討  
道長家に仕えた紫式部の『源氏物語』について、権力者の実態や後宮政策を読むという視点から再検討した。

(3) 儀式関係資料の調査 『御産部類記』の精査、続いて賀茂祭、五節、朝覲行幸、後の行啓関係記事を収集・分析した。必ず女方が関わり、人気も高い儀式・行事なので、資料も多い。女方がこれらの儀式・行事にどう関わったのかを見極めることで、後宮サロンと儀式全般の関係を探るための手がかりを得ることができた。

(4) 仏教関係記事 非常に詳しく道長家の仏事関係行事を載せる『栄花物語』の分析を進めた。『栄花物語』にみえる仏教関係記事そのものの検討に加え、いかなる種類の仏典をどのように取り入れているかを見定めることで、道長家の女方と仏教の関係を考えた。

#### 2009年度

(1) 女性の出家に関する諸問題の検討  
道長の妻倫子と長女彰子の出家に関する資料を収集し、サロンに集う女性達の出家に対する思い、女主人の出家の前後でのサロンのあり方の違いをみることで、サロンという集団における仏教思想のあり方を考察した。また、サロンがその主人の人生史にともない求めるものが変わっていくこと、すなわちサロンを、構成員と同じように成長し、老いていくものとして捉えていく方法を探った。

(2) 道長の建立した法成寺と女性との関りの検討  
法成寺が当時のあらゆる仏教信仰を、現世においてかたちにした寺院であることを確認し、さらに、その西北と東北の角に、倫子と彰子が堂を建立した意義を考察した。

(3) 道長死後のサロンのあり方について  
歴史物語、歌合関係資料に加え、『小右記』『左経記』『春記』等の漢文日記を調査した。  
道長死後のサロンは、道長時代の後宮文化の継続に加え、彰子を中心により自由で

大掛かりな行事の催行により、その存在を主張していくことを明らかにしていった。

2010年度

藤原道長家の後宮サロンの実態を踏まえ、うえでの文学作品の新たな読み、評価の可能性を探った。

#### 4. 研究成果

上記の調査、研究により、後宮サロンを文学のみならず、政治、経済、宗教といった観点から総合的に捉えることができた。

続いて最終的な課題である文学作品の新たな読みへと考察を進めた。

具体的には、

(1) 道長家に仕えた女房達による作品、日記では『和泉式部日記』『紫式部日記』、家集では『紫式部集』『赤染衛門集』『伊勢大輔集』、さらに『御堂関白集』（藤原道長の家集というよりもむしろ道長家の贈答歌集という性格が強い）などを対象に、新たな読み、評価が可能なことを明らかにした。

(2) 歴史物語に関しては、『栄花物語』続編を中心に研究を進めた。道長死後を扱う続編は、作者も成立年代も巻三十までの正編と異なる。また、ある程度まとまった資料の寄せ集めを主体として出来ているとされる。今回、彰子サロンの影響を見出すという観点から分析し、そこでの継続的な修史事業が『栄花物語』の資料の中核になっていることを確認できた。『栄花物語』続編は、道長家の女性サロンという恵まれた環境が生み出した最良の華の一つとして位置づけられる。

(3) さらに、以上のような実生活に根ざした作品群の読解をもとに、虚構の物語である『源氏物語』の新たな読みもさぐった。さまざまな場合に小さな女房集団の記録が

書かれて伝えられていたと考えられ、それらの中には優れた物語作品とも言えるレベルに達していたものもあった。『源氏物語』のいわゆる「歴史性」もそのような資料を念頭において考えるべきだという新しい視点が得られた。

今後は、本研究によって得られた後宮サロンに関する知見をもとに、さらに文学作品の読みを進める必要がある。

加えて、『栄花物語』に対する『大鏡』のように、男性の手になる作品について考察を始めたい。女性側の諸特徴と対比することで、男性方の文学活動の環境、目的がいつそう明確になると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計2件）

①池田尚隆，他、思文閣出版、御堂関白記全註釈 御堂御記抄 長徳四年 長保元・二年、2010、198（13-18）

②池田尚隆，他、竹林舎、平安文学と隣接諸学7 王朝文学と交通、2009、630（492-512）

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

池田 尚隆（IKEDA NAOTAKA）

山梨大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：70151298

##### (2) 研究分担者

該当なし

##### (3) 連携研究者

該当なし